

第10話 平重盛の忠孝

その中であって、^{ひと}独り平重盛が朝廷に対する^{ちゅうぎ}忠義を忘れず。

常に父清盛を^{いさ}諫めて、大きな^{あやま}過ちのないようにした。

さて、こうして平家を滅ぼそうという第一回の計画は敗れたが、疑い深い平家の連中が、これには何か^{しりお}大きな尻押しがありはしないかと、だんだん取り調べて行くと、果たしてこの事件には、後白河法皇もご関係になっていたということが分かって来た。それで、日本をわが物顔にわが^{まま}俣をしなれて来た清盛は、怒りもすれば、不安^{いさ}心にも思った。

清盛、法皇を^お押し込^こめんとする

法皇をこのままにして置き申したら、何時また^{いつ}不平党のやつらが何かとわるい事をお勧めするかもしれない。わが平家を滅ぼそうとなさらないものでもない。もし平家を滅ぼせという^{いんぜん}院宣でも下されて、平家が「朝敵」と^{ちやうてき}宣伝されるような日になって、悔しがったとて、もう^{ておく}手遅れだ。これは今の中に^{うち}法皇を鳥羽の北殿におしこめて、ご^{いんきよ}隠居させ申して、もう決して政治上の相談なんかが出来ないようにしてしまったほうがよいと、^{しんか}臣下をして決してするまじきことを我^{わがまま}俣な心から考え出して、^{さつそく}早速兵士を^{しょうしゅう}招集して、^{ふい}不意に^お院の御所に^よ押し寄^{じゅんぴ}せる準備をした。

この^{れい}令が下ると、そら、^{だじやうにゆうどう}太政入道様のご命令だと、平家一族一門はあわてさわぎ、^{われ}我れ先にと^{さき}甲冑^{かつちゅう}を身に固めて、ぞくぞくと西八条の^{やしき}邸へ詰めかけた。

ちょうど東山の^{こまつてい}小松邸に帰っていた^{しげもり}重盛のところにも、この事が聞こえた。^{しげもり}重盛は余りの事にびっくりして、よもやそんな事はあるまいと思っただが、しかし、父入道のあの^{わがまま}我俣、あの^{かんしゃく}癩癩から考えると、或いはそういう^{ふちゆうひどう}不忠非道をしな^{まんいち}いともいえない。万^{ちゆう}一そんな事があつては国家の一大事だと、^と車を中に飛ばせて西八条に来て見ると、なるほど大変な^{さわ}騒ぎです。門の外から内にかけて、甲冑姿の人や馬がいっぱいで、平家の^{あかはた}赤旗や家々の^{もんどころ}紋所を^そ染めた^{はたさしもの}旗指物も^{いきお}勢いよく^{ひるがえ}風に翻っている。そこに馬の^{はらおび}腹帯を固めているものがあれば、ここには^{かぶと}冑の^お緒を^し締めているものがある。命令が一つ下れば、^{うちた}すぐにも打立つばかりになっている。

^{しげもり}重盛は^{えぼ}烏帽子直衣に^{ゆびぬき}指貫という、^{とお}ふだんの姿でその中をしづしづと通って行く。と、それを見た弟の^{むねもり}宗盛がその袖を引いて、「^{そで}兄上、これほどの御大事になぜ^{ぶそう}武装をなさらぬのです！ 父上はもう^{よろい}鎧を着ておいでですぞ」といった。^{しげもり}重盛は振り返って、「^{ちやうてき}御大事とは何事だ？ どこに朝敵がいる？ わしは^{このえ}近衛大将であるぞ。朝廷の御大事でない以上、^{するど}武装はせんぞ」と^{しか}鋭く叱りつけておいて、父の前に近づきました。

^{しげもり}重盛がまた大いに父を^{いさ}諫める

清盛は、間を隔てて^{しげもり}重盛の言葉を聴いて、また^{しげもり}重盛めが^{りくつ}理屈を言いおる。しかし、今日はいつもと

ちがは違う。大いに言って聞かせてやるとは思ったものの、さすがに心にひけめがあるので、賢人の重盛の手前、どうやら鎧姿で逢うのはきまりが悪くもなり、あわてて鎧の上に白絹の法衣を着たが、胸板の金物が少し外れて見える。で、それを気にして隠そう隠そうとしきりに法衣の襟を掻合わせていた。重盛は静かにその前に坐って、頭を垂れたままだった。清盛は何も言い出さず、重盛も黙っていた。居並んでいた一族の者たちも、どうなることかと息を潜めて控えていました。

ややしばらくしてから、清盛はわざと落ち着いた風をして、「今度の事の次第を察するに、成親卿らが事は末の末だ。本は法皇のお考えにあった事だ。だから、しばらく世の中の鎮まる間、法皇を鳥羽の北殿へお遷し申すか、さもなければこの邸にお移り願おうと思うが、お前は どう思う？」といった。重盛は皆まで聞かないうちに、涙をはらはらとこぼした。「どうしたのだ! どうしたのだ?」と清盛が呆れていると、重盛はやっと涙を抑えて、

「只今の仰せを承って、御運ももはや末に成ったかと覚えます。人の運命が傾きかけると、きっと悪事を思い立つものです。また、お姿をお見上げ申して情けなく存じます。太政大臣ともある者が甲冑をつけるというは、日本国が始まって以来、嘗てないことです。殊にはご出家の御身で、御有様は何事です? 古語に、恩を知るを人として知らざるを鳥獣とす、ということがあります。

恩の最大なるものは君恩です。況してわが家は桓武天皇の御末ではありますが、中ごろに衰え果てましたのを、父上の世になって、先祖以来嘗てない太政大臣の位まで昇られ、数にも足らぬこの重盛のようなものまで大臣、大将に任ぜられて居ります。のみならず、日本国の半ばは平氏一門の領地となつて、一族の者も過分な出世をして居ります。これも皆君のご恩ではありませんか? この大恩を忘れて、みだりに法皇をお遷し申したりしましたならば、忽ち神罰が中って、平氏は亡ぶでありますよ、

既に成親卿を始め一味の者を召し捕っておかれた上は、たとえ法皇が何と考え遊ばそうと、何の恐れることがありますか? それぞれの者に相当した罪を行った上で、ことの次第を申し上げて、君の御為にはいよいよ忠勤を励み、民の為にはますます憐みを垂れて撫でいたわってやりましたならば、君にも、なんでお考えを直し給わぬことがありますよ」と涙をはらはらとこぼした。

忠ならんとすれば孝ならず、孝ならんとすれば忠ならず

「これほどまでに申し上げても、なおお聞き入れがないならば、叶わぬまでも重盛は院の御所を御護ります。それが君の重いご恩に報い奉る臣下の道です。さうなりますれば重盛の身に代わり、命に代わろうと誓った侍共も少々いますから、一戦出来ないこともありますまい。

ああ、しかしながら悲しいかな、君の御為に忠義を尽くそうとすれば、山よりも高い父の恩を忘れねばならず、不孝の罪をのがれようとすれば、君の御為に不忠の臣とならなければなりません。一体、わたくしはどうしたらよいか、分からなくなりました。不忠の臣となるか、不孝の子となるか、そのどちらにもなりたくないと思えば死ぬ外はありません。死ねば、院の御所に向われる父上のお供をしなくとも済み、又、院の御所をお護りしなくとも済み。

第10話 平重盛の忠孝

こういう情けない目に遭うというのも、**重盛**に運がないからです。 どうでもこのお企くわだてを遂とげようとおぼしめすなら、まづ**重盛**の首を斬ってからにしてください」

こうやって来て**重盛**はことばを切ると、直衣の袖を顔に当ててさめざめと泣いた。 そこにいた一門の人々もたまらなくなって涙を流しました。

さすがの清盛も、最も頼みにしている**重盛**がこう言うのを聞くと、その真心まごころに動かされたのか、涙ぐみさえして見えたが、それでもなお負けない顔で、「それほどまでにお前がいうなら、わしは何もかも思い止とまろう。 但し、斯ただ様な事かようを思い立ったのも、全く自分の為ではない。 わしはもう年を取って先が見えている。 たしだ子孫しそんの安あん穩のんを願ねがうばかりである。 しかし、その事が間違あやった、愚おろかな企くわだてであるというなら、どのようにもお前の好よいようにして貰もらおう」と言い捨てて奥いに入すってしまっおくた。

弟らを戒める

重盛は居並いならんでいる弟らいましに向って、「たとえ父上いさが間違あやった事となさろうとも、これをお諫いさめするのが子たる者の道ではないか。 それなのに、一いっしょ緒しよになって事をしようという事がありますか？ これから後も気をつけなさい」といって、立たって中門ちゆうもんのところおもに出ると、庭にわに居並いならんでいる重なる侍共しげもりに、「**重盛**の申まをしたことを慥たしかに聞いたか？ 院いんの御所ごしょへお供ともをするのは、**重盛**の首かぶが斬きられるのを見てからにせよ」といって、しづしづと自分おのの邸やしきに帰かえって行いきました。

重盛、兵を集める

重盛は帰かえってからも、父入道いりだうの心こころがけの悪わるい事をしきりに心配しんぱいしていたが、やがて俄にわかかに何か思おもいついたように、主馬判官しゅまはんくわん盛国せいこくという者ものを使いもちに立たてて、「**重盛**こそ天下てんかの大事だいじを聞き出した。 **重盛**のためしげもりに働はたらこうと思おもう者ものは急いそいで参まゐれ」と触ふれさせた。

これを聞きく者ものどもは、あの落おちち着きいた、めさつたな事ことには騒さわがぬ人ひとがかよかうに言いわれるのだから、きつと大おほ変へんな事ことに違ちがいない。 それ急いそげと、西にしは八条はちじょうの清盛せいせいの邸やしきにいた数千すうせんの兵士へいしは勿もちろん論ろん、その夜よから朝あさにかけて、京都きんぎよの内うち外そと、五里六里ごりりくの遠とほくの者ものまで、われもわれもと**重盛**の小松こまつの邸やしきを指さして集あまって来る。 中ちゆうには鎧よろいを着きて胃てをかぶらぬものもあれば、矢やを負おって弓ゆみを持もたぬ者ものもあるというように、みんながみんな大おほあわてにあわてています。

清盛の心やわらぐ

清盛せいせいはどうした事ことかと不ふ審しんに思おもって、誰たれかに尋たづねようとして見みたが、邸やしきには召めいし使しいの女によや尼になどが残のこっているばかりで、兵士へいしらしいものは一人ひとりもいいななかった。 「いいっいっいたい、**重盛**は何なにのためために人ひとを集あめるのか？ 院いんの御所ごしょの身方みかたにななって、ここを攻せめて来るのではあるまいか？ 何なんにしても**重盛**と仲なが悪わるくななっては困こる」と思おもったので、法皇ほうわうを迎むかえ奉ほうろうとした心こころも和ならなぎ、急いそいで鎧よろいを脱ぬいで、白絹しらぎぬの法衣ころもに袈裟けさをかけて、珠数じゆずをつまぐりながら、殊勝しゆしょうらしくお経きやうを誦よんでいました。

重盛の深慮

第10話 平重盛の忠孝

一方、重盛しげもりの小松もりくにの邸めいでは、盛国ぐんぜいが命なを受けて、集しるまってきた軍勢おもの名を記すと、主なる侍が三千余人に、その家来を合わせて二万騎に上っていた。重盛しげもりはそれを見た後、筑後守家貞ちくごのかみいえさだ、肥後守貞能ひごのかみさだよしという二人の侍を呼んで、自分の考えを詳しく話して、西八条に使いにやった。二人は清盛の邸に行くと、弓を脇わきに挟さしはさみ、胄うづくまを脱いで、庭先に蹲まって待っている。清盛は誰も人がいないために、退屈だれの余り、今朝もお経を誦たいくつんでいたが、二人を見ると、「おお、家貞いえさだ、貞能さだよしか。重盛しげもりが軍勢を召集めて、ここには一人もいないが、いったいどうしたのか？」という、家貞いえさだは畏かしこまって、

「法皇には入道殿が御所に押し寄せられるとの噂うわさをお聞きになり、既に朝敵たる上は、速やかに追討せよとの院宣すでを重盛しげもりに下されました。昨日も申し上げたように、父上ちやうてきに向って弓矢を引くことは致そうとは思いませんが、重盛しげもり、官に在って禄かんを戴あく上は、又、勅ろくに背き奉ることも出来ません。父上みことがこのことをお聞きなされば、ご自害そむもなされるかも知れない、まづ参まいってご守護しゅごを致せ。お命いのちをば重盛しげもりがご奉公ほうこうに代えて必ずお助け申します、との仰せでございます」

といったので、清盛は呆れて、「本当か？ 清盛の心を直させようとて、だますのであろう」と初めは信じなかったが、院宣いんぜんの事は既に軍兵ぐんびやうにも発表いつわになっていたのだから、偽りであるべき筈はずがないという、清盛は太息といきをついて、何事も重盛しげもりに任せるから、院宣のご返事もよきように頼むおそといって、全く恐れ入かえって、二人を選かえしました。

重盛の忠孝両全

重盛しげもりは帰ってきた二人から清盛のその時の様子を聞いて、やっと安心したが、それと共に、たとえその無道むどうを抑おさえて、不忠の臣おとことならしめないためであるとはいえ、ともかくも父あざむを欺あざむき、父に心配させたのは、子ことして大の不孝だいであるとして、はらはらと涙を流して泣いたので、2人の者も共に鎧ぬの袖そでを濡ぬらした。実際、無道な父の子として生まれた重盛しげもりの心の中は、どんなだったでありません。

さて重盛しげもりは、中門まで出て、集まって来た軍兵らに向かい、「折角来ては貰せっかくったが、重盛しげもりが聞き出したことは間違いであったから、今日は安心して引き取まちがってくれ。しかし、以後もまた、こういう事があつたら直ぐに来てくれ。また間違いであろうなどと思って、なおざりにしてはいけないぞ」と、よくよく言い聞かせてみんなをかえしました。

法皇はあとでこの事をお聞きになって、今に始めぬ事であるが、怨みうらをば恩おんを以もって報むくいられた、重盛しげもりの心こころに対して恥はづかしい、と仰せられたということである。

(第10話 平重盛の忠孝 終わり。次は前頁に戻り、第11話 平氏の暴虐 へ)